

3 漢字の始まり 〜古代文字の世界〜

書写の教科書では、「漢字ワンダーランド」(P3)というコーナーで、漢字の始まりから現代の文字に至るまでの流れを紹介しています。連載の最終回となる今号では、漢字の原点に立ち返り、古代文字の不思議な形とその魅力についてお話ししていきたいと思います。

1 最古の漢字は甲骨文

現在のところ、最古の漢字は、殷時代の紀元前十三世紀前後より十一世紀中頃まで、二百数十年にわたって使用された甲骨文と考えられています。甲骨文とは「亀甲・獣骨文」の略で、その名の通り亀の甲(腹甲)や獣の骨(主に牛の肩胛骨)に刻まれた文字です。

十九世紀の末に河南省安陽市付近の殷墟(殷王朝の遺跡)から出土し、その数は十萬片以上といわれていますが、約一割が日本国内に所蔵されています。国内での大きなコレクションは五つあり、第一位が京都大学人文科学研究所の約

三千二百片、第二位が東京大学東洋文化研究所の約一千三百片、第三位が天理大学参考館の約七百片、第四位が東洋文庫の約六百片、そして第五位が台東区立書道博物館の約五百片です。

2 甲骨文の内容

甲骨文にはどんなことが書かれているのでしょうか。実はこれ、殷時代に行った占いの記録なのです。殷王朝では、天候、農業、軍事や王の行動など、王家にかかわるさまざまな事柄を占う習慣がありました。甲骨の裏側に、鑽や鑿と呼ばれる小さな穴をほり、そこに熱を加えると、

表面に亀裂(ひび割れ)が生じます。貞人(占い師)たちは、その亀裂の形状によって事の吉凶を占い、その結果を亀裂のそばに刻したのです。では簡単に、占いの方法を記してみます。

- ① まず、亀の甲や牛の肩胛骨の表面をなめらかにして、占いに使いやすいよう整えます。
- ② 次に、甲骨の裏面に小さな穴(鑽、鑿)をほります(図2)。
- ③ 占う内容を決めます。
- ④ 穴(鑽)の部分に熱を加えます(図2に、焦げ跡があります)。
- ⑤ その熱によって甲骨の表面にできたひび割れを見て、吉か凶かを判断します。

⑥ 最後に、占った内容とその結果を甲骨に書き、刻します。

図1・2に示した甲骨文は、天候に関する占いで、「雨が降るかどうか」と尋ねて(図1)、占った結果、「雨が降る」と判断しています(図2)。この甲骨文にある「雨」という字の形は、空から水がしたたり落ちてくる様子を表しています。また、「卜」という字は訓読みで「うらなう」と読み、これはひび割れの形を表しています。「ボク」という音読みは、骨がひび割れたときに発する音からきたものだともいわれています。「卜」字は、甲骨の占いから生まれた漢字なのです。

3 甲骨文の書体区分

甲骨文は、用いられた字形や書体の特徴から、五つの時期に分けることができます。それを明らかにしたのが、殷墟の発掘に指導的役割を果たした考古学者董作賓(一八九五―一九六三)です。では、五期の時代区分について、流れを追いながら簡単に説明しましょう。

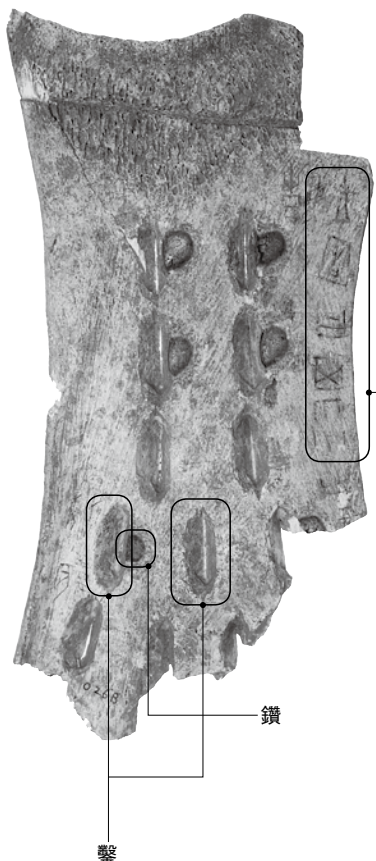
最初はのびのびと力強く(第一期：雄偉)、だんだんおとなしくなり(第二期：謹飭)、慣れも加わって次第に墮落の傾

表 図1 牛肩胛骨(第一期)の表面



庚辰
卜。賓貞。
丁亥其
雨。
【読み】
庚辰に
卜へり。賓が貞ふ。
丁亥に其れ
雨ふらんか。」と。

裏 図2 牛肩胛骨(第一期)の裏面



王固曰。其雨。
【読み】
王固て曰く、「其れ雨ふらん。」

図1〜6すべて台東区立書道博物館蔵

▶図6 泰山刻石―百六十五字本―



▶図5 石鼓文―安国本―



古いに用いた最古の漢字である甲骨文に始まり、王室の権威を誇示した青銅器の銘文、そして春秋戦国時代の動乱期を経て、秦の始皇帝が文字を統一して制定した正式な篆書まで、古代文字はさまざまに変化を遂げていきました。こうした文字の不思議な形を通して、限らない広がりをもった漢字の世界に興味をもってくだされば幸いです。

源流となったものです。秦時代の始皇帝は、大篆を基礎に文字を統一し、正式な篆書体である小篆を制定しました。小篆の代表的なものとして「泰山刻石」(図6)があり、これは秦の始皇帝による全国統一の偉業をたたえた記念碑としてよく知られています。また始皇帝は、度量衡も整備し、重さや容積に関して一定の単位ごとに基準器を作りました。「權」は、重さをはかる分銅、「量」は容積をはかる枬です。基準器には、どれも始皇帝の全国統一をたたえる四十文字の詔勅(皇帝の文書)が小篆で記されています。

漢字の世界にふれよう

今回ご紹介した甲骨文や青銅器は、下記の博物館でご覧いただくことができます。

台東区立書道博物館

本館にてさまざまな甲骨文、青銅器を展示しています。
■アクセス：JR鶯谷駅北口から徒歩5分
■H P：http://www.taitocity.net/taito/shodou

東京国立博物館

東洋館8室では、特集陳列「中村不折と高島菊次郎」において書道博物館の所蔵品が展示されます。
■会 期：2014年2月4日(火)～3月30日(日)
■アクセス：JR上野駅公園口、鶯谷駅南口から徒歩10分
■H P：http://www.tnm.jp
■主な展示作品：石鼓文―安国本―(戦国/前5～前4世紀頃) 台東区立書道博物館蔵
泰山刻石―百六十五字本―(秦/前219) 台東区立書道博物館蔵

鍋島稲子
台東区立書道博物館主任研究員。筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了。博士(芸術学)。東京国立博物館客員研究員。大阪教育大学非常勤講師。

4 甲骨文の重要性

甲骨文が発見されたのは一八九九年、つまり約百年前のことです。日本では明治三十二年にあたりますから、江戸時代や明治初めの人たちは、甲骨文の存在を知らなかったことになります。ところが甲骨文の出現によって、三千年以上も前の中国の人々の生活が明らかになりました。これは書の歴史だけでなく、世界の歴史にとっても重大な発見だったのです。

向となりますが(第三期…頽廢)、一種のルネッサンスにより一時的にもち直し、第一期のような強さが再び現れて(第四期…勁峭)、最後にはこぢんまりとまとまります(第五期…嚴整)。このように、最初は粗削りで野性的だったものが次第に整齊され、同時にすがすがしさを失っていったんは退廃し、また立ち直つてまとまり始め、最後は完成に向けてきれいに整っていきます。

5 篆書が完成するまで

―金文、大篆、小篆―

甲骨文に次ぐ古い文字は、青銅器に鑄込まれた金文です。青銅器は殷時代より作られていましたが、西周時代(紀元前十一～八世紀)にその製作が最も盛んに

現在の漢字につながっているため、今の私たちにも解読できる甲骨文があるのは、実に驚くべきことです。これが漢字のとてもおもしろいところであり、他の国々の文字にはない特徴です。甲骨文の不思議な世界は、漢字の始まりの秘密を解き明かす重要な鍵となっているのです。



▶図4 小克鼎の内側に鑄込まれた銘文



▶図3 小克鼎

なり、銘文(青銅器の文字)も長文化します。この時期の銘文は、西周の王室あるいは上層貴族など、ごく限られた人たちによるもので、文字の統一性が比較的保たれており、端正かつ堂々とした書きぶりです。紀元前九世紀頃に作られた小克鼎(図3)には、優美で洗練された書体の銘文が鑄込まれています(図4)。

周の権力が衰えると、多数の国が興る春秋戦国時代に入ります。この時代の文字は地方によって異なり、南方の楚系文字や西方の秦系文字など、種々の字形が存在します。また青銅器以外に、石に刻された文字も新たに出現します。現存する最古の石刻文字である「石鼓文」(図5)は、大篆あるいは籀文といわれ、篆書の